

第5章 自然環境質

第1節 序 説

昭和30年代後半から40年代後半にかけてのわが国の高度経済成長は、本県にも著しい影響をもたらした。大規模な住宅団地や工業団地などの造成、東北自動車道や東北新幹線の建設、仙台港、石巻工業港や塩釜漁港の建設、さらには、農林業の土地基盤整備や採石などの地下資源の開発なども県内各地で進められた。

その結果、本県における都市的機能の集積は高まり、各種の利便性や効率性は著しく向上するとともに、県民1人当りの分配所得も増加し、生活水準も大幅に向上した。しかし、それとはうらはらに、昔から県民に親しまれ、生活にうるおいを与え、人間性の形成にも大きな影響を与えてきた野や山、小川、木立やとんぼ、ちょうちょうなどの小さな生きものなど、われわれの生活に密着した身近な自然を含めて、そのいくつかは失われてしまった。

より良い生活環境の形成は、単に所得の増加や、利便性だけではなく、高密度で複雑な人間社会のなかであって、豊かな人間性を培い、文化を育くむ場が基盤となっている。特に、自然環境は、人間の生活にとって最も基本的な要素であるという認識が高まり、さらに、人々の自然環境に対する欲求も、量的なものばかりでなく、質的なものを含めたものとなってきている。

本県の自然環境の変化を土地利用の面からみると、工場用地、住宅用地などが著しく増加した反面、森林、原野が減少している。特に、工場用地は、昭和40年から50年にかけて2.7倍に伸び、事務所、店舗などを含めた宅地も2倍近くに伸びている。このように総じて本県の土地利用は、都市的な利用へ急激に移行してきており、それだけ良好な自然環境も失われてきている。

また、特に、森林、農用地、宅地について、県下7圏域ごとの推移を最も開発行為の進んだ昭和47年から50年までの4か年間だけでみると、広域仙台都市圏における宅地の増加と森林、農用地の減少が特筆される。さらに、森林についてみれば、広域仙台都市圏のほか、広域仙南圏、広域大崎圏における森林の減少が大きい。

このような地域開発などによって失われていく自然のなかには優れたものが多く、それは土地利用上の未調整や、学術調査の不足、さらには、アメニティなどは握の立ち遅れなどから生じたものが多い。

自然は、植物の遷移からもうかがわれるとおり、ブナ林やモミ林などの極相林が形成される